

資質・能力でつなぐ教科・総合連携型単元デザイン  
の開発：  
小学校国語科と総合的な学習の時間の実践を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 溝口, 雅也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00028173">https://doi.org/10.14945/00028173</a>

# 資質・能力でつなぐ教科・総合連携型単元デザインの開発

—小学校国語科と総合的な学習の時間の実践を通して—

溝口 雅也

## 1 問題の所在

### (1) 教科の学びが活かされていない

平成 31 年度全国学力学習状況調査の質問紙結果を見ると、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」の質問に対して「あてはまる」と回答した割合は 64.2%であった。それに対して「国語の授業で学習したことを、普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか。」の質問では「あてはまる」と回答した割合は 37.2%であった。つまり大半の子どもたちは、国語は将来役に立つ学習だと感じているのに、普段の生活の中では活用しようとしていないということが分かる。これは学んだことを知識として持っていて、活用できる生きた知識になっていないということと同じである。どうして学んだことが活用されないのだろうか。小学校の教員を対象にベネッセ教育総合研究所が 1998 年から 2016 年まで調査した「授業で特に心がけていること」の結果では「教科横断的な授業や合科的な授業」の項目は、02 年の 21.5%を最高に低い結果となっている。つまり、授業を行っている教員が学んだことを活かせるような授業デザインを意識していないのではないだろうか。

### (2) 学びを活用した授業とは

先行研究から、学びを活用した授業を行うためには、目的意識が大事であり、必要感のある課題を設定すること、その一つとして総合的な学習の時間と関連されることが有効であることが分かった。また、関心・意欲の高まりが向上したことは検証されているが、資質・能力がどのように育成されていくのかを検証した実践になってはいなかった。成田（2011）でも、「活用型授業」が真に成立しているか否かは、思考力・判断力・表現力を分析する必要があることを述べている。学びを活用した授業を行うことで、子どもたちの意識はどのように変わり、学びを活用することで、資質・能力がどう育成されるのかを検証していくことは、新学習指導要領が目指す授業づくりに提案できるものになると考える。

## 2 研究の目的と方法

### (1) 協力校の実態

#### ①国語に関すること

協力校の 6 年生を対象に実態調査を行ったところ、国語の授業の内容はよく分かっているが、学習したことが将来社会で役に立つと思っていない、普段の生活の中で、国語の学習を活用している児童が少ないことが確認された。授業と生活が切り離されてしまっている結果であり、全国調査の結果よりも、問題がより顕著に表れていた。さらに教科の枠を超えて学びが活用されてい

るか調査するために、総合的な学習の時間と教科のつながりを調べてみることにした。その結果、総合的な学習の時間に一番学びが生かされていると思っている教科は、「社会」だった。これは、社会の内容を発展させた学習を行ってきたからだと考えられる。続いて、「国語」が多かったが、児童によってだいぶ差があることが確認された。

## ②総合的な学習の時間に関すること

どうして、教科の学びは総合的な学習の時間に生かされていないのか。協力校における年間計画には、教科とのつながりが明記されておらず、詳しい指導計画は、学年に任されていた。また、総合的な学習の時間で育成する資質・能力は、記されているが、子どもたちは、総合的な学習の時間でどのような力を身に付ければいいのか、あまり意識したことがない。目的のために学習はしていても、その学習でどのような力を身に付けるかまで考えていなかったのではないだろうか。子どもたちが、総合的な学習の時間を通して、どのような力を身に付けることができるのか自覚しながら学ぶことで、これまでに身に付けた既有知識と学びを結び付け、学んだことを生かした学習になるのではないかと考えた。

## ③課題となっている資質・能力

課題をまとめた結果、本校児童の課題となる資質・能力は、「情報の扱い方に関する事項」と「自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明すること」だった。この二つの課題に焦点をあてた単元を構想することにした。

### (2) 研究の目的

目的① 教科の学びを総合的な学習の時間に生かせる単元デザインの開発

目的② 開発した単元デザインの効果、有用性の検証

### (3) 単元デザインの構想

課題が多かった「整理・分析」「表現」に特に焦点をあて、国語科で「整理・分析」「表現」における資質・能力（収集した情報を目的に合わせて、分類したり、関連付けたり、多面的に見たりして、課題解決に向けて分析する。相手や目的に合わせて、分かりやすくまとめている。）を育成し、その力を総合的な学習の時間の探究過程に生かそうと考えた。単元デザインのポイントとしては、①国語の学びを総合に生かす②課題となっている資質・能力を把握する③重点を置く探究過程を設定する④資質・能力に指導を重視した単元計画の作成⑤子ども自身がどんな力を身に付けることができるか理解できるようにすることがあげられる。

### (4) 教材観

国語「AIで言葉と向き合う」（学校図書）

「AIで言葉と向き合う」は、筆者がオノマトペを数値化するシステムを作ったことで、感覚という人の働きについてもAIが実現することが可能になり、人間しかできないものといわれてきた様々なことに、AIの最新技術を取り入れることで、人間とAIが共存する新しい世界が開かれていくだろうと主張している文章である。この文章を読み解くことを通して、筆者の意見と事例との関係を捉え、論の進め方を考えながら要旨をまとめ、見方を広げることがねらいとしている。今回は、この教材を読み解くだけでなく、筆者が読者に自分の意見や考えを、根拠や事例を通して、どのように伝えようとしているのか、筆者がどうやって教材文を書いているのか、分析し、評価することで、論の進め方、情報の扱い方、多面的に分析する力を身に付けようと考えた。

## 総合的な学習の時間「交通安全リーダーになろう」

本単元では、地域の交通安全についての課題を見つけ、危険個所についての情報を収集したり、自分たちにできることを考えたりしながら、情報を整理、分析し、マップとしてまとめ、発表・情報発信する活動を通して、地域や社会に参画しようとする態度を育てることを目標としている。今回は、最後のまとめを主張文の形にすることで、国語の学びを生かそうと考えた。自分の主張を決め、どのような情報が必要か、何を根拠にすればいいのか、主張と事例のつながりを考え、必要な資料を用意し、相手に分かりやすく伝える。探究過程を通して、身に付けるべき資質・能力を意識しながら進めることで、子どもたち自身が自分の学びを確かめることができるだろう。

### （５）身に付けたい資質・能力の整理

工藤・石上・高橋（2018）を参照に、国語と総合的な学習の時間を連携して単元開発を行うために、二つの単元で育てることができる資質・能力を整理した。二つの単元は、どちらも情報と情報を結び付け絵考える力が育成される。また、必要な情報を精査し、適切に表現する必要がある単元である。資質・能力は、それぞれを別で扱うよりも、連携して育成することが効果的であることから、共通に働く資質・能力、積み重ねにより身に付く資質・能力（上位目標）単元で育てたい資質・能力（中位目標）、一時間ごとに育てたい資質・能力（下位目標）として具体的に捉えることで、本単元における指導の充実を図ることができると考えた。

### （６）国語の学びを総合に生かす

国語と総合的な学習の時間をつなぎ、共通の資質・能力を育成するためには、国語で学んだことが、総合的な学習の時間に生かされる必要がある。国語で身に付けた知識・技能が国語でしか発揮されないのでは、意味がない。今回、情報と情報を結び付けて考えたり、主張と事例を関連付けて捉えたりする力や、説得力のある文章構成（論の構成）を国語で身に付けようと考えた。国語で学んだことをすぐに総合的な学習の時間に活用するのではなく、学んだことが身に付いているのか、子どもたち自身が学びを確かめることができると考えた。実際に主張文を書いてみることで、新たな課題が出てくるだろう。その課題を国語で指導することで、総合的な学習の時間ではそれぞれの探究過程に集中できるようにもなる。このように、国語と総合的な学習の時間の間に学びを生かすための活動を入れることは、国語の学びをよりいっそう生かすことにつながるだろう。

## 3 結果と分析

### （１）国語の学びの分析

学んだことは身に付いたのか、ルーブリックをもとに単元末に書いた主張文を項目ごと0～2点（合計10点）で評価した。結果を学年平均でみると、主張と事例のつながり（1.06点）事例と資料のつながり（1.20点）論の構成（1.12点）文章表記・表現（1.36点）資料の選択（1.21点）となった。文章表記が一番高く、主張と事例のつながりの数値が低かった。主張と事例のつながりを意識はできているが、複数の事例をまとめて関連付けることまでできた児童が少なかった。

次に、教材文を読み取ることができる子は、その観点で主張文を書くことができるのか、知識として理解したことがどのくらい活用できるのかを検証するために、1学級を対象として人数推移を調査した。その結果が表1である。読み取り評価では、別教材を用意して、学んだことを読

み取る小テストを行った。その結果、A 評価 9 名、B 評価 16 名、C 評価 3 名だった。そして、学んだことを生かして書いた主張文の評価では、A 評価 9 名のうち 7 名は主張文の評価でも上位群に入った。しかし、2 名は中位群に下がってしまった。さらに、読み取りが B 評価だった児童 16 名のうち 13 名は中位群に入り、3 名は下位群に下がってしまった。逆に、中位群から上位群に上がった児童は一人もいなかった。

表 1 読み取り評価と主張文評価の人数推移

教材文を使って、子どもたちは主張文の書き方を学んだ。しかし、知識として理解しても、すぐに技能として活用することは難しかった。つまり知識を理解してもすぐに生きた知識となるわけではない。資質・能力として身に付くわけではないということである。だからこそ、この後につながる総合的な学習の時間と連携し、もう一度この資質・能力を活用することで、学びが深まり、生きた知識となって身に付くのではないだろうか。

読み取り評価		人数推移	主張文ルーブリック評価				
評価	人数		人数		得点	群	
A	9	→	7	7	0	10	上位群
			0		4	9	
			0		3	8	
B	16	→	2	17	2	7	中位群
			13		3	6	
			2		12	5	
C	3	→	0	4	2	4	下位群
			3		0	3	
			1		1	1	
			1		0	0	

(2) 国語の学びを総合的な学習の時間に生かすことができたのか

活用する場を取り入れた国語の学習では、約 70%の児童が上位・中位群に入り、ねらいとしていた力を身に付けることができた。さらに学びをつなげた総合的な学習の時間では、約 79%が上位・中位群に入っていた。国語ができた子は、そのまま総合的な学習の時間でも力を発揮することができたのか、総合的な学習の時間があつたからこそ資質・能力を育成することができたのか、単元デザインが子どもたちにどのような変容を与えたのか、傾向と変容を分析した。

その結果、上位群の児童はほとんどがそのまま総合でも上位群に入っていた。つまり、国語の学習ができた子は、総合でもその学びを発揮することができていたのである。教科の学びの重要性が伺える。しかし、一番の変容が表れたのは、中位群から上位群へと得点が上がった児童である。国語では 56 人いた中位群のうち、27 人が総合では上位群に上がった。約半数の児童が上位群に変容したのである。さらに、下位群から中位群へと得点が上がった児童は、14 人もいた。国語と総合を連携した単元デザインは特に中位群の児童に効果的に働いたことがこの表から示された。

表 2 ルーブリック評価の得点にもとづく人数推移

国語			人数推移	総合					
群	得点	人数		人数	得点	群			
上位群	10	13	→	38	68	33	10	上位群	
	9	12		27		19			9
	8	17		3		16			8
中位群	7	15	→	4	40	16	7	中位群	
	6	16		22		9			6
	5	25		14		15			5
下位群	4	11	→	0	29	9	4	下位群	
	3	7		7		10			3
	2	8		22		3			2
	1	8		1		2			1
	0	5				1	0		

(3) 教科・総合連携型単元デザインによる資質・能力の育成検証

今回の国語と総合的な学習の時間を連携した単元デザインにおいて、資質・能力が育成されたのかを検証するために、国語の主張文と総合的な学習の時間で書いた主張文をルーブリックの各項目で比較し、その得点差に有意差がみられるか対応のある t 検定を行った。(Table1)

最も有意差が見られたのは、「主張と事例のつながり」であった。これは、自分の主張に説得力を持たせるためには、事例とのつながりが大事であることを総合の探究過程を通して実感したからだと考える。相手意識を持つことで、課題に取り組む姿勢、伝えたいという思いが結果として表れたのだろう。また、合計評価においても 0.1%水準で有意に高かった。この結果から、情報と情報を結び付ける力、相手に根拠を明確にして説明する力が資質・能力として育成されたといえるのではないだろうか。

Table1 国語と総合のルーブリック評価の平均値とSD及びt検定の結果

	国語		総合的な学習の時間		t 値
	平均	SD	平均	SD	
主張と事例のつながり	1.02	0.66	1.42	0.56	7.14***
事例と資料のつながり	1.15	0.72	1.33	0.76	2.99**
論の構成	1.07	0.71	1.45	0.67	6.91***
文章表記・表現	1.32	0.64	1.46	0.61	2.91**
資料の選択	1.19	0.67	1.28	0.70	1.60
合計評価	5.76		6.93		7.32***

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

#### 4 総合考察

##### (1) 教科・総合連携型単元デザインの開発について

###### ①付けたい力を丁寧に指導することができる。

資質・能力を短時間で身に付けることは難しいことである。教科における資質・能力、教科外の資質・能力、どちらも決められた時数内で指導しなければならない現状が学校現場にはある。しかし、今回の教科・総合連携型単元デザインでは、もともと年間計画に予定していた単元を共通の資質・能力でつなげることで、身に付けたい力を長期的な指導で扱うことができるようになった。教師の事後インタビュー調査でも、指導のしやすさを教師が感じていた。

###### ②子どもたちが、自分の学びを実感できる。

今回の単元デザインでは、国語と総合的な学習の時間の間に、学んだことを活用する場を設定したことで、自分がどのくらいできるようになっているのか確かめる場にもなった。国語で教材文の読み取りはできても、実際に主張文を書いてみると「主張と事例のつながり」をどのようにすればいいのだろう、文章と文章をつなげるにはどうしたらいいのかなど、学んだことを生かして活用する難しさにどの子も直面していた。この時間に感じた難しさを拾い上げ、再確認したことで、その後の総合へと生かすことにつながったのである。国語の主張文ではなかなか書けなかった児童も、総合の時間では国語の課題を生かし、主張文を書くことができた。子どもたちも自分の成長、学びを実感したのである。

##### (2) カリキュラムマネジメントとして

教科の枠を超え、教科と連携した単元デザインは、カリキュラムマネジメントとしても捉えることができるだろう。総合的な学習の時間を軸として、各教科と連携することは、学びを活用する場になったり、教科の枠を超えた全ての学習の基盤として活用される資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育てたりすることもできるだろう。今回は、課題となっていた資質・能力が国語で育成できるものであったため、国語と総合的な学習の時間を連携したが、身に付けたい資質・能力に合わせて教科や単元を選択し、総合的な学習の時間と連携する、または、総合的な学習の時間で身に付けたことを教科の学びに生かすといった考え方もできるだろう。教育課程をすべて見直し、カリキュラムを計画していくことは大変な作業である。しかし、今回の単元デザインのように、総合的な学習の時間を軸として身に付けたい資質・能力で教科と

連携することは、単元ごとに行うことができるため、マネジメントしやすいのではないだろうか。

## 5 成果と今後の展望について

### (1) 成果

教科の学びを生きるものにするには、ただ総合的な学習の時間と連携するのではなく、子どもたちが自分の学びを確かめ、学んだことが身に付いているのか、総合ではどんなことに気を付ければいいのか、学びを実感しながら進めていくことが大切である。学びを生かすには、自分の学びを理解すること、つまり学びに向かう力を育てることが重要になってくるのではないだろうか。

教科と総合的な学習の時間を連携するポイントとして、共通に働く資質・能力を見出し、関連させたことがあげられる。教科のどの学びが、総合のどの探究過程で働くのか、単元構想で位置づけることで、教科と総合の学びの中心として指導していくことができたのである。

今回、総合的な学習の時間で課題となっていた資質・能力を国語の授業からも改善しようと、国語の指導計画を改善した。その結果、国語の力が高まれば総合的な学習の時間での力も高まっていることが分かった。しかし、総合的な学習の時間に国語の学びを活用することで、国語の力も高めることができたと言えるだろう。国語と総合を連携することで、どちらの学習においても相乗効果が働いたという結果になった。

教科の学びを生かすことで、資質・能力を育成することができる。教科・横断的な学びがこれからの学習において大事になってくると新学習指導要領でも言われているが、本研究では、これらのことを、実践を通して検証することができたことが成果であろう。

### (2) 今後の展望について

学びを活用するためには、単元の課題設定が重要になってくるだろう。学んだことを無理やり活用させるのではなく、既有知識を駆使し、活用することで問題解決につながるオーセンティックな課題（真正な課題）設定を行うことが、子どもたちの学びに向かう力を引き出し、自然と学びを活用する態度につながると考える。そのような授業デザインをこれからも大切にしていきたい。また、今回実践した教科・総合連携型単元デザインは、一つのデザイン例である。国語と総合だけでなく、各教科、各単元においても連携デザインを考えることができる。さらに、教科と総合をどのように連携させるのか、本研究のように、一つの探究過程に焦点を当てるのか、それとも探究過程全体を通して、教科と連携するのか、様々なデザインをこれからも考え、実践していきたい。そして、学んだことを生かそうとする、生かすことのできる子どもたちを育てるために、連携型単元デザインが効果的に働くことを、多くの先生方に伝え、実践例の一つとして普及させていきたい。

### 主要・参考文献

- ・平成 31 年度全国学力学習状況調査質問紙項目・結果
- ・成田 (2011) 「小学校国語科の読むこと指導における「活用型授業」の成立要件に関する一考察」
- ・田村学 (2019) 「深い学び」を実現するカリキュラムマネジメント
- ・工藤・石上・高橋 (2018) 「図画工作科・国語科における有機的教科連携カリキュラムの開発に関する研究」